『枕草子』の「ねたし」の位置

土屋博映

一、はじめに

『枕草子』の(1)美的理念語に関する研究は数多くなされている。本稿筆者も、「をかし」とその周辺の語について、いくつかの論をまとめてきた。

しかし、その美的理念語を研究するだけで、はたして『枕草子』の本質を、清少納言の人間像を、つかみとることができるのだろうかという(2)疑問を抱くようになってきた。

筆者の考えの変遷は次のようなものである。

さて、枕草子の作者の美を評価する意識は如何なるものであっただろうか。それは、まず、「をかし」と感じ得るか否かからはじまったものと考えられる。「をかし」とはある一点に快感を持てばよいのであって、それほどの強い意味はないわけである。ところが、そうして美を評価していったとしても、「をかし」だけでは十分に表現しきれない部分も当然表れてくるわけである。対象に「をかし」を感じ、それで事が足りれば「をかし」と評価するが、高貴なもの、それを強調したい場合、「めでたし」が用いられ、小さいもの、幼いものには「うつくし」が「をかし」で言い表せなかったものを補充するといった過程をたどるのである。(拙稿(3)『枕草子』の「をかし」と「あはれなり」より)

というプロセスを経て、

美を表現する言葉というものは、醜を表現する言葉、もしくは概念があってはじめて、美を美とし、醜を醜として認めることができるわけであって、もしもこの世の中に「美」しか存在しないなら、「美」を表現する必然性もないということになろう。つまり、『枕草子』の美的理念語を追求し、検討しようとするならば、醜を表現する言葉、嫌悪表現語についても同様の過程を経なければならないのである。(「(4)『枕草子』の「にくし」の価値」より)

筆者は、この論の変化にも見られるように、初めは美を表現する言葉を追求してきたが、その美的理念語をより正確に把握するため

には、美と対照的な位置を占める、醜を表現する言葉を研究しなくてはならないという考えに至ったわけである。

既に前記論文中に記したことであり、いささか気がひけるのだが、あらためて確認するということと、論のわかりやすさを考え、ここに、醜を表現する言葉、すなわち嫌悪表現語が主題として提示されている「もの型章段」を、日本古典文学大系の本文の順序のとおり、並べ、その分量を行数で示したものを、ここに再掲することにする。

すさまじきもの（57）　たゆまるるもの（2）　人にあなづらるるもの（2）　にくきもの（53）　にげなきもの（13）　おぼつかなきもの（3）　ねたきもの（24）　かたはらいたきもの（9）　あさましきもの（10）　くちをしきもの（9）　見ぐるしきもの（10）　いひにくきもの（4）　わびしげに見ゆるもの（6）　暑げなるもの（3）　はづかしきもの（20）　むとくなるもの（15）　はしたなきもの（7）　つれづれなるもの（2）　とり所なきもの（5）　おそろしげなるもの（2）　いやしげなるもの（4）　胸つぶるるもの（8）　名おそろしきもの（6）　むつかしげなるもの（6）　くるしげなるもの（6）　心もとなきもの（26）　たのもしげなきもの（4）　したり顔なるもの（8）　さわがしきもの（6）　ないがしろなるもの（2）　ことばなめげなるもの（2）　さかしきもの（11）　いみじうきたなきもの（2）　せめておそろしきもの（3）　うちとくまじきもの（2）

以上35という嫌悪表現語が主題として提示されているわけで、さらに分量が多いもの10段を並べると次のようになる。

1　すさまじきもの（57）
2　にくきもの（53）
3　心もとなきもの（26）
4　ねたきもの（24）
5　はづかしきもの（20）
6　むとくなるもの（15）
7　にげなきもの（13）
8　さかしきもの（11）
9　あさましきもの（10）
10　見ぐるしきもの（10）

以上10段が、嫌悪表現語として、10行以上の分量をもつのである。前記論文でも述べたことではあるが、これらは作者がより興味をひかれた段であり、より嫌悪表現語として重要なものだという意識をしていた段に他ならない。

これらがどのように用いられているかを把握することが、『枕草子』の本質にせまる上で重要だということは言うまでもないであろう。そこで、筆者は、「にくし」と「すさまじ」、さらに「こころもとなし」について検討し、結果を公にしたわけである。

「にくし」については、

「にくし」は感情的な面が強く、単に不快を意味する気持が強いものの評価語として「をかし」と対照的な位置での評価の一端と

なっていたということは言えよう。少なくとも「をかし」と判断する基準の一つに「にくし」や「にくからず」があったことはまちがいない。醜を表現する語として、美を表現する「うつくし」や「めでたし」などと同等の価値をもっていると言えるのである。

（拙稿「(5)『枕草子』の「にくし」の価値」より）

とこのように結論し、「すさまじ」については、

「すさまじ」の本質は、「かならず来べき」「今年はかならず」「かならずさるべき」などとあったごとく、当然そうなるはずという前提・基準があることであり、「にくし」にはそれがなく感情語に近いものと言える。（中略）

筆者はこれまで、清少納言は、まず対象を「をかし」（快）かそうでないか（不快）でとらえ、次に他の美的理念語や嫌悪表現語に分類するという構造をもっていたと考えてきたが、本稿の検討により、対象をまず「をかし」と「にくし」でとらえ、そこから「めでたし」などの美の方向、「すさまじ」などの不快の方向に位置づけていったものと推定するに至った。

「をかし」――「にくし」などの下位分類に、「めでたし――すさまじ」などの批評語が位置すると考えるのである。

（拙稿「(6)『枕草子』の「すさまじ」の位置」より）

と結論し、「こころもとなし」については、

「こころもとなし」は、不安感のみに偏らない。本質は、期待がなかなかかなえられず、じれったく思う気持ちであり、そのじれったさは、多くの不快感につながるものではあるが、時に待ち遠しくかんじられるものでもある。不安感と期待感、言わば善悪両用であるのが、「こころもとなし」であり、簡単に不安を代表とする言葉と決めつけるのは、好ましいことではない。善悪両用という多義性が、作者にとって多用した一因となっているのであろう。

「おぼつかなし」は、「こころもとなし」よりも不安感が強い言葉であった。それはどうしてかと言うと、はっきりしないということが前提となっているからである。はっきりしないということは、よくわからないということであり、それはやはり不安感に直結してしまうものである。

以上二語に対し、「うしろめたし」は、不安感がもっとも強い言葉である。それは、本質が、頼りにならない、言わば、不信感だからであろう。また、そのように意味が限られているということは、使用数が少なくなるということにつながっていると思われる。

以上のことから結論すると、不安感の程度から位置づけると、

うしろめたし（強）――おぼつかなし（中）――こころもとなし（弱）

となり、多義性、言わば作者からみた重要度から位置づけると、

こころもとなし（重要）――おぼつかなし（普通）――うしろめたし（非重要）

ということになる。

（拙稿「(7)『枕草子』の「こころもとなし」について」より）

と結論したのである。それらをふまえて本稿では、分量としては四番目の、「にくし」と非常に近く用いられていると思われる「ねたし」をとりあげ、検討を加えようと思う。「ねたし」の位置について考え、さらに『枕草子』の本質にせまってみたいと思うのである。

二、「ねたきもの」の対象

ここでは、「ねたきもの」（九五段）という、「ねたし」を主題とした段について検討を加える。本段で、作者はどのようなものを「ねたし」の対象としているのかを概観してみる。

○　人のもとにこれより遣るも、人の返りごとも、書きてやりつるのち、文字一つ二つ思ひなほしたる。

○　とみの物縫ふに、かしこう縫ひつと思ふに、針をひき抜きつれば、はやくしりを結ばざりけり。

○　また、かへさまに縫ひたるもねたし。

○　おもしろき萩・薄などを植ゑて見る程に、長櫃持たる者、鋤などひきさげて、ただ掘りに掘りて往ぬるこそわびしうねたけれ。

○　受領などの家に、さるべき所の下部などの来て、なめげにいひ、さりとて我をばいかがせんなど思ひたる、いとねたげなり。

○　見まほしき文などを、人の取りて、庭に下りて見たるが、いとわびしくねたく、追ひていけど、簾のもとにとまりて見たる心地こそ、飛びも出でぬべき心地すれ。

一見してわかるごとく、「ねたし」と感じる対象は、人の行動である。そして、その行動が、大別して、①自分の行動に対して「ねたし」と感じる場合と、②他人の行動に対して「ねたし」と感じる（批評する）、の二つであるということがわかる。

①については簡単に言えば、「しまった」という感情であり、②では「しゃくだ」といった気持であるということが、おおまかではあるが、つかめると思う。

たとえば、手紙の返事の表現については、後で気がついて、失敗したことを「しまった」と思うのであり、縫い物については、端を結ばなかったり、逆に縫ったりと、同様である。

萩・薄などを掘りとって行ったり、身分の低い者が偉そうにするのは、そんなことをする価値のない者に対して、「しゃくだ」という気持を抱いているのである。

また、「わびしうねたけれ」とか、「わびしくねたく」とかあるように、「わびし」という言葉と関連があることも注目される。

三、「ねたきもの」という段について

ここで、「ねたきもの」という段の内容についてもう少し詳しく、全文を検討してみることにする。

(1)　ねたきもの　人のもとにこれより遣るも、人の返りごとも、書きてやりつるのち、文字一つ二つ思ひなほしたる。

まず「ねたきもの」という主題を提示し、手紙の例があげられる。

こちらから手紙をやった時でも、返事でも、書いてわたしてしまった後に、「文字」を思いなおしたことをあげている。

これは、心の中では、「うまくやった」と思ったことが、「実際にはそうでなかった」ことに気がつき、「しまった」と思った、それが「ねたし」の対象となっている。

(2) とみの物縫ふに、かしこう縫ひつと思ふに、針をひき抜きつれば、はやくしりを結ばざりけり。また、かへさまに縫ひたるもねたし。

これは、縫い物についてである。まず、うまく縫ったと思ったのに、端を結ばず、だめにしてしまったこと、次に、逆に縫ってしまったことが、「ねたし」の対象となっている。この二つともに、(1)と同様、うまくやったと思ったことが、実際にはそうでなかったことに気がつき、しまったと思っているのである。ここで、「かしこう」とある点に注目したい。「かしこし」と思ったことが、破れた時に、「ねたし」と感ずる、という事実である。

(3) 南の院におはします頃、「とみの御物なり。誰も誰も、あまたして、時かはさず縫ひてまゐらせよ」とて、賜はせたるに、南面にあつまりて、御衣の片身づつ、誰かとく縫ふと、ちかくもむかはず、縫ふさまも、いと物ぐるほし。命婦の乳母、いととく縫ひはててうち置きつる、ゆだけの片の身を縫ひつるが、そむきざまなるを見つけで、とぢめもしあへず、まどひ置きて立ちぬるが、御背あはすれば、はやくたがひたりけり。わらひのしりて、「はやく、これ縫ひなほせ」といふを、「誰、あしう縫ひたりと知りてかなほさん。綾ならばこそ、裏を見ざらん人も、げにとなほさめ、無紋の御衣なれば、何をしるしにてか、なほす人誰もあらん。まだ縫ひ給はざらん人になほさせよ」とて、聞かねば、「さいひてあらんや」とて、少納言の君などいふ人たちの、もの憂げにとりよせて縫ひ給ひしを、見やりてゐたりしこそをかしかりしか。

これは、(2)の「ねたし」と感じた例からの連想の発展である。つまり、縫い物で失敗したということから、具体的な「南の院」の例を思い出し、記したというわけである。

はや縫い競争をして、命婦の乳母が、一番先に縫い終えたのだが、実は逆に縫ってしまったという事件を記述しているのである。

この乳母が、自分のミスを指摘され、「誰、あしう縫ひたりと知りてかなほさん」と言った以下の会話が、「ねたし」という気持をもとにした発言ということになるだろう。

(4) おもしろき萩・薄などを植ゑて見る程に、長櫃持たる者、鋤などをひきさげて、ただ掘りに掘りて往ぬるこそわびしうねたけれ。

これは、趣深い萩や薄などを植えて、観賞していたところ、長櫃を持った者が、鋤などひきさげて、どんどん掘りとって行ってしまったことに対し、「ねたし」が用いられている。

「おもしろき萩・薄」を観賞するのは、快よいものであるが、それ

を「長櫃持たる者」が、鋤などをひっさげて、どんどん掘って行ってしまう。おそらく身分の低い者が、ある高貴な人物の依頼でも受け、掘りとって行ってしまったものなのであろう。

自分の、観賞という「快」の気持ちが、身分の低い者の行為によって破られる、それが本例での「ねたし」である。

(5) よろしき人などのある時はさもせぬものを、いみじう制すれども、「ただすこし」などうちいひて往ぬる、いふかひなくねたし。

これは、(4)からの続きである。(4)で、掘りとって行くことを「ねたし」ととらえた後に、もしも、相当な身分の人がいれば、そんなことはしないのに、作者達がとめたのでは、それをきかないことに対し、さらに「ねたし」を用いるのである。

掘って行くことをやめてほしいという自己の願望が、身分の低い者に否定されてしまったのが、この例の「ねたし」である。

(6) 受領などの家に、さるべき所の下部などの来て、なめげにいひ、さりとて我をばいかがせんなど思ひたる、いとねたげなり。

本例は、(5)からの連想の発展であろう。

受領の家に、しかるべき家――おそらく「受領」よりも高貴な――の家来がやって来て、無礼にふるまい、しかも偉そうにしている様子に対し、「ねたげなり」が用いられている。「なめげ」との関連にも注目したい。

本来なら、はしにも棒にもかからないような、下賤な者が、主人の力を借り――虎の威を借る狐――て、無礼に偉そうな態度をとる、それがしゃくにさわるということであろう。

(7) 見まほしき文などを、人の取りて、庭に下りて見たるが、いとわびしくねたく追ひていけど、簾のもとにとまりて見たる心地こそ、飛びも出でぬべき心地すれ。

これはまた、冒頭の手紙の連想にもどるが、本例は、他人の行動をとりあげている。

自分がまず見たいという願望を抱いている手紙を、他人が先に取って、見てしまった状態を「わびしくねたく」と言っている。他人が、自分の願望を無視し、勝手な行動をすることに対し、「ねたし」が使われているのである。なお「わびし」と関連があることには注目しておきたい。

次に、「ねたきもの」の中に収められているものではないが、ここでとりあげた内容に非常に近いものがある、「一本　二八段」の例をとりあげてみたい。

(8) 長谷にまうでて局にゐたりしに、あやしき下﨟どもの、うしろをうちまかせつつ、居並みたりしこそねたかりしか。

これは、「あやしき下﨟ども」が、「うしろをうちまかせ」ては「居並みたり」であった行動に対し、「ねたし」が用いられている。つまり、身分の低い者たちが、貴人のまねをして居並んでいたことを「ねたし」と言っているのである。

(9) いみじき心起してまゐりしに、川の音などのおそろしう、呉

階をのぼるほどなど、おぼろけならず困じて、いつしか仏の御前をとく見たてまつらん、と思ふに、白衣着たる法師、蓑虫などのやうなる者ども集りて、立ちゐ額づきなどして、つゆばかり所もおかぬけしきなるは、まことにこそねたくおぼえて、おし倒しもしつべき心地せしか。

これは、仏道に大変な信仰心をおこして、お参りをしたのに、「白衣着たる法師」や、「蓑虫などのやうなる者ども」などの、身分の低い者たちが、まわりに遠慮もしないで礼拝している行動に対し、「ねたし」が用いられている。

(10) やむごとなき人などのまゐり給へる、御局などの前ばかりをこそ払ひなどもすれ、よろしき人は制しわづらひぬめり。さは知りながらも、なほさしあたりてさるをり、いとねたきなり。

これは、(4)の遠慮もしない身分の低い者たちに、「やむごとなき人」なら、追いはらうこともできるけれど、「よろしき人」程度ではそうもできない。わかっているけれども、それを「ねたし」だというのである。

これら三例は、いずれも、身分の低い者たちが、自分の身分をもかえりみず、遠慮もしない行動に対して用いられている例である。つまり、しゃくだ、という気持である。なお、(8)の「うしろをうちまかせつつ」とか、(9)の「所もおかぬ」とか、(10)の「制しわづらひ」などという表現が「ねたし」と関連していることに注目しておく必要がある。「ねたし」を特徴づける表現である。

四、「ねたきもの」の段以外の用例

(11) この四月のついたちごろ、(中略)「露は別れの涙なるべし」といふことを頭の中将のうちいだし給へれば、源中将ももろともにいとをかしく誦じたるに、「いそぎける七夕かな」といふを、いみじうねたがりて、「ただあかつきの別れ一すぢを、ふとおぼえつるままにいひて、わびしうもあるかな。すべて、このわたりにて、かかること思ひまはさずいふは、くちをしきぞかし」など、返す返すわらひて、(一六一段)

(12) もろともにねたがりいひし中将は、おもひもよらでゐたるに、「ありしあかつきのこといましめらるるは。知らぬか」とのたまふにぞ、「げに、げに」とわらふめる、わろしかし。(一六一段)。

(13) 「などてかそれにおとらん。まさりてこそせめ」とてよむに、「さらに似るべくだにあらず」といへば、「わびしのことや。いかであれがやうに誦ぜん」とのたまふを、「三十の期」といふ所なん、すべていみじう愛敬づきたりし」などいへば、ねたがりてわらひありくに、(一六一段)

(14) 「参ぜむとするを、今日明日の御物忌にてなん。「三十の期に及ばず」はいかが」といひたれば、返りごとに、「その期は過ぎ給ひにたらん。朱置臣が妻を教へけん年にはしも」とかきてやりたりしを、またねたがりて、(一六一段)

この、(11)〜(14)の四例は、いずれも一六一段である。(11)の例と(12)の

例が、一つのまとまりで、いずれも、洒落た言葉を言われた源中将が、くやしがる場面である。もちろん、「しゃくだ」という意味なのだが、これは表むきであって、実際には「わらふ」という言葉が関わっているように、相手に感心をする気持がこめられているのである。

また、「わびし」や「くちをし」という言葉と関連があることにも注目しておきたい。

次の、(13)と(14)が、また一まとまりで、いずれも(11)・(12)と同様に、「しゃく」なのだが、実際には「わらふ」という言葉が関わっているように、やはり、相手に感心をする気持がこめられている。

(15) 雨のいたう降る日、藤三位の局に、蓑虫のやうなる童のおほきなる、白き木に立文をつけて、「これたてまつらせん」といひければ、(中略)つとめて、手洗ひて、「いで、その昨日の巻数」とて請ひ出でて、伏し拝みてあけたれば、胡桃色といふ色紙の厚肥えたるを、あやしと思ひてあけもていけば、法師のいみじげなる手にて、

これをだにかたみと思ふに都には
葉がへやしつる推柴の袖

と書いたり。いとあさましうねたかりけるわざかな、誰がしたるにかあらん、(一三八段)

(16) やうやう仰せられ出でて、「使にいきける鬼童は、台盤所の刀自といふ者のもとなりけるを、小兵衛がかたらひいだしてしたるにやありけん」など仰せらるれば、客もわらはせ給ふを、ひきゆるがしたてまつりて、「など、かくは謀らせおはしましし。なほ疑ひもなく手をうち洗ひて、伏し拝みたてまつりしことよ」と、わらひねたがりゐ給へるさまも、いとほこりかに愛敬づきてをかし。(一三八段)

(15)・(16)ともに同じ段である。(15)は形容詞で、誰かが、藤三位の局のところに、皮肉っぽい和歌をよこしたことに対し、「ねたし」が用いられている。(16)は、主上にだまされたことがわかり、それに対し、「ねたがる」が使われている。(15)は、本当に「しゃく」なのであって、「あさまし」と関連することに注目したい。(16)は、だましたのが主上なので、「しゃく」とは言えど、実際には、誇らしい気持がある。また「謀る」という言葉が関連することにも注目したい。

この二例でわかることは、「しゃく」という意味でも、(15)のように本当に「しゃく」な場合と、(16)のように、表むきは「しゃく」であっても、根底には、誇らしさや感心をする気持がこめられる場合があるということである。ただし、その「しゃく」と感ずる基本的構造は、「自分の思っていたこと——予想外(の悪い状況)——ねたし(しゃく)」ということで、一致する。

(17) 「さてもねたく見つけられにけるかな。さばかりいましめつるものを。人の御かたには、かかるいましめ者のあるこそ」などのたまはす。「春の風は、そらにいとかしこうもいふかな」など、またうち誦せさせ給ふ。「ただ言にはうるさく思ひつよりて侍り

し。今朝のさま、いかに侍らまし」などぞわらはせ給ふ。（二七八段）

(18) 小若君、「されど、それをいととく見て、「露にぬれたる」といひける、おもてぶせなりといひ侍りける」と申し給へば、いみじうねたがらせ給ふもをかし。（二七八段）

(17)と(18)は同一段で連続する。関白がこっそりと花を盗もうとした（盗ませようとした）ところを発見されたことに対し、(17)では「ねたし」が用いられている。(18)は、「露にぬれたる」と洒落た言葉を言われたことに対し、「ねたがる」が使われている。どちらかというと、(17)の方が「しゃく」な気持が強く、(18)は感心する気持が強い。

いずれにしても、自分の考えがうまくいかなかったり、予想もしないことがおこったりすることに対し、「ねたし」は用いられているのである。

(19) 上達部などの、また、はじめてまゐらむと申さする人のむすめなどには、心ことに紙よりはじめてつくろはせ給へるを、あつまりて、たはぶれにもねたがりいふめり。（一五八段）

これは、普通の身分の娘と異なり、上達部などの、高い身分の娘が、初めて出仕しようとする時には、格別な待遇をうけるということに「ねたがる」が使われている。この段の主題は「うらやましげなるもの」であるので、「ねたし」は「うらやまし」とも関連するものであることに注目したい。

(20) 殿上人なども、「なほこれ一人は」などのたまふを、「うらやみありて、いかでか」など、かたくいふに、宮の女房の廿人ばかり、蔵人をなにともせず、戸をおしあけてさめき入れば、あきれて、「いとこは、ずちなき世かな」とて、立てるもをかし。それにつきてぞ、かしづきどももみな入る、けしきいとねたげなり。（九二段）

これは、規則を守らせようとした蔵人の拒否もかまわず、宮の女房たちが入りこんで来たので、「ねたげなり」と感じたのである。

(21) ほととぎすは、なほさらにいふべきかたなし。いつしかしたり顔にも聞えたるに、卯の花・花橘などにやどりをして、はたかくれたるも、ねたげなる心ばへなり。（四一段）

この例文の前には、「もろ声になきたるこそ、さすがにをかしけれ。」とあり、それをうけて、「いふべきかたなし」とあった上での「ねたげなり」の用法がある。つまり、この場合の「ねたげなり」は、「をかし」という美的理念語と同等の位置をしめている。「すばらしい」というほめ言葉なのである。

(22) 沓の音、夜一夜聞こゆるが、とどまりて、ただおよびひとつしてたたくが、その人なりと、ふと聞ゆるこそをかしけれ。いとひさしうたたくに、音もせねば、寝入りたりとや思ふらんとねたくて、すこしうちみじろぐ、衣のけはひ、さななりと思ふらんかし。（七六段）

これは、女を訪れた男が、戸をたたくのだが、中で物音がしないと、女は寝こんでいると、男に思われるのではないか、ということ

に「ねたし」が用いられている。この「ねたし」は、前に「をかし」があるように、「をかし」に対立する位置もしめているようである。

(23) いみじうかしこまり、つちにゐし家の子。君たちをも、心ばかりこそ用意し、かしこまりたれ、おなじやうにつれだちてありくよ。上の近う使はせ給ふを見るには、ねたくさへこそ覚ゆれ。(八八段)

これは、「めでたきもの」という段の一節で、六位の蔵人について述べた部分である。主上が側近としてお使いになる時には、「ねたし」と思われるというのだ。この段が「めでたきもの」であることを考えあわせると、この「ねたし」は、「しゃく」なほどに「めでたし」なのであり、ほめ言葉ということになる。

(24) 「「いかにしていかに知らましいつはりを空にただすの神なかりせば」となん御けしきは」とあるに、めでたくもくちをしうも思ひみだるるにも、なほ昨夜の人ぞねたくにくまほしき。(一八四段)

これは、作者が中宮に誤解されるようなことをした仲間の女房がいて、それが「昨夜の人」であり、それに対し、「ねたし」が用いられている。これは文字通り「しゃく」の意味である。「ねたし」は、ここでは「にくむ」と関連し、さらに「くちをし」とも関連している。「めでたし」とは対立した感情であることもうかがえる。

(25) 人けのすれば、衣のなかよりみるに、うちゑみて長押におしかかりてゐぬ。恥ぢなどすべき人にはあらねど、うちとくべき心ばへにもあらぬに、ねたうも見えぬるかな、と思ふ。(三六段)

これは、親しい男でもないのに、寝姿を見られてしまったことに対し、「ねたし」が用いられている。本来の「しゃくだ」の意味である。

(26) なほこの者、むげに絶えはてて後こそ、さすがにえあらね。もしいひ出づることもやと待てど、いささかなにとも思ひたらず、つれなきもいとねたきを、今宵あしともよしともさだめきりてやみなんかし。(八二段)

(27) 「ことに、また、これが返しをやすべきなどいひあはせ、「わろしといはれては、なかなかねたかるべし」とて夜中までおはせし。(八二段)

(28) 「これは、身のためも人の御ためも、よろこびには侍らずや。司召に少々の司得て侍らんは、何ともおぼゆまじくなん」といへば、げにあまたして、さることあらんとも知らで、ねたうもあるべかりけるかなと、これになん、胸つぶれて覚えし。(八二段)

(26)〜(28)の例は、同一段である。

(26)は、絶交した作者が、何か言ってくるかと待っているのだが、平気で何も言ってこないことに対し、「ねたし」が使われている。これは、「いひ出づることもや」という期待(願望)が、「つれなき」という状態で破られたことが「しゃく」なのである。

(27)は、うまい返事でなくては、返事をしてもかえって「ねたし」

だというのである。つまり、よいと思ってやった返事が、そうでないことに対して「しゃく」なのである。

(28)は、皆が作者に対して、こらしめてやろうという計画をしていたことを知らないでいたことに対し「ねたし」が用いられている。これは、予想外の嫌なことが自分に関わっていたことを知ったことに対し、「しゃく」だと使っている。なお「胸つぶる」は、「ねたし」と感じたことによっておこる状態である。

(29) おほかたさし向ひてもなめきは、などかくいふらんとかたはらいたし。まいて、よき人などをさ申す者は、いみじうねたうさへあり。田舎びたる者などの、さあるは、をこにていとよし。(二六二段)

これは、「文ことばなめき人こそいとにくけれ」にはじまる段である。本例は、「よき人」、つまり、身分の高い人などを無礼に言うのは、「ねたし」だと言うのである。本例から、「ねたし」は、「なめし」と関連を持ち、「かたはらいたし」よりも強い嫌悪感を持っていることがわかる。なお、対立する語は、ここでは「よし」である。

(30) 檳榔毛の車などは、門ちひさければ、さはりてえ入らねば、例の筵道しきておるるに、いとにくくはらだたしけれども、いかがはせむ。殿上人、地下なるも、陣にたちそひて見るも、いとねたし。(八段)

車寄せにつけると思った車が、門が小さいので入れず、筵道の上を歩き、身分の低い者などに姿を見られてしまったことに対し、「ねたし」が用いられている。これは、予想が破れて、とんでもない事態に至ったことに対し、「しゃく」だというのである。本例から、「にくし」や「はらだたし」とも関連することがわかる。

(31) 十五日、節供まゐりする、かゆの木ひきかくして、家の御達・女房などのうかがふを、うたれじと用意して、つねにうしろを心づかひしたる、けしきもいとをかしきに、いかにしたるにかあらん。うちあてたるは、いみじう興ありてうちわらひたるはいとはえばえし。ねたしと思ひたることわりなり。(三段)

これは、十五日の節供に、かゆの木で女性の後をうてば子を産むという俗信をふまえた例文である。うたれまいと用心していたにもかかわらず、うたれてしまったことに対し、「ねたし」が用いられている。うたれまいという願望が破れたことに対し、「ねたし」が「しゃくだ」の意味で使われているのである。

(32) 馬にても、さやうの人の行くはをかし。さやうの所にて聞くに、泥障の音の聞ゆるを、いかなる者ならんと、するわざもうち置きて見るに、あやしの者を見つけたる、いとねたし。(一九四段)

これは、車に乗った人、また馬に乗った人が、漢詩を朗詠したりして行くことを「をかし」と評価し、それに対し、そんなすてきな人が来たかと思ったら、「あやしの者」であったという、期待はずれに、「ねたし」が用いられている。この「ねたし」は「をかし」と対照的な批評語としての位置をしめていると思われる。

(33) はらひ得たる櫛、あかに落し入れたるもねたし。（一本　二八段）

これは、やっとそうじをした櫛を、おとしてしまったことに対し、「ねたし」が用いられた例である。せっかくきれいにしたものが再びよごれてしまったことに対し、「しゃく」だというのである。

(34) さかしう、やがて末まではあらねども、すべて、つゆたがふことなかりけり。いかでなほ、すこしひがごとみつけてをやまん、とねたきまでにおぼしめしけるに、十巻にもなりぬ。（二三段）

これは、主上が女御に『古今和歌集』についての質問をしたところ、まったくミスがないので、それが「ねたし」だというのである。「しゃく」なのではあるが、「しゃくなほどにすばらしい」といったニュアンスはもっている。

(35) げに、そもことわり、人のにくむをよしといひ、ほむるをもあしといふ人は、心のほどこそおしはからるれ。ただ、人に見えけんぞねたき（三一九段）

これは、作者が、『枕草子』を他人に見せたくなかったのに、そうなってしまったということに対し、「ねたし」が用いられている。つまり、見せたくないという願望が破られたことが「しゃく」なのである。

五、おわりに

「ねたし」の基本構造は、

① こうあってほしいという願望

←

② 破られる

←

③ 「ねたし」と感じる

ということである。ただし、①の「こうあってほしいという願望」は、「うまくやりとげたと思った」、「まさかそんなことはしないだろう」、といった場合も含む。つまり、願望や期待、さらに予想が破られる状態が「ねたし」なのである。

この「ねたし」は、基本的に、相手の行動について「ねたし」と感じる場合（これをAとする）と、自分の行動について「ねたし」と感じる場合（これをBとする）との二つに大別される。

とりあげた34例中(3)は(2)に含む)、Aが28例、Bはわずかに6例である。

B＝(1)・(2)・(28)・(31)・(33)・(35)

これら6例は、一応「しゃくだ」とするものの、その根底にあるのは、自分の「しまった」という気持であることに注意しておきたい。

ところで、Aは単純ではない。私見では次の三つに、さらに分類

されるようである。

A　しゃくだ（感情語）

A′　しゃくなほどによい（評価語）

A″　しゃくなほどに趣深い（美的理念語）

Aの「しゃくだ」というのが「ねたし」の最も多い例であって、17例ある。

A＝(4)・(5)・(6)・(7)・(8)・(9)・(10)・(15)・(20)・(22)・(24)・(25)・(26)・(27)・(29)・(30)・(32)

これは、身分の低い者が偉そうにしたとか、思いもよらないいやな目にあった時である。

A′は8例ある。

A′＝(11)・(12)・(13)・(14)・(16)・(17)・(18)・(34)

これは、相手が洒落た言葉を言った時に、使われる意味である。

A″は3例のみである。

A″＝(19)・(21)・(23)

(19)は「うらやましげなるもの」の中に存在し、美的理念語の「うらやましげ」と同等の位置にある。

(21)は「ほととぎす」の様子について「趣深い」という意味で用いられ、「をかし」と同等の位置にある。

(23)は「めでたきもの」の中に存在し、美的理念語の「めでたし」と同等の位置で、蔵人を評価している。

関連語としては、

A＝わびし・いふかひなし・なめげ・所もおかぬ・わづらふ・くちをし・あさまし・はかる・にくむ・つれなし・なめし・かたはらいたし・にくし・はらだたし

A′＝ほこりか・をかし・愛敬づく・かしこし

A″＝うらやましげ・をかし・めでたし・をかし

となっている。

「ねたし」が『枕草子』で用いられている様相を図示すれば、次のようになる。

ねたし
←
自分の行動　相手の行動
シマッタ(B)　シャクダ
←
シャクダ(A)　シャクナホド
ヨイ(A′)
←
シャクナホド
趣深イ(A″)

「ねたし」の対象となるものは、ほとんどが人間の行動であって、それについて、思いのままにならないことが「ねたし」でとらえら

れる、というのが基本的構造である。

それが、相手の行動の場合は、「にくし」に近く、不快な気持で「ねたし」（しゃくだ）と言い、自分の行動であれば、後悔（しまった）の気持をこめて「ねたし」（しゃくだ）と言うのである。

ところが「ねたし」はその、不快や後悔にとどまらず、快の方向に進み（しゃくなほどよい）、さらには美的理念語（しゃくなほど趣深い）の領域にまで至るのである。

これは、「ねたし」自体が、「にくし」のように「をかし」に対立する位置をしめたり、「すさまじ」が「にくし」の下に位置するのとはちょっと異なる位置にあることを暗示している。

つまり、「にくし」に近いところに位置しながらも、「をかし」に近いところにもある。

仮に、このように位置づけることができようかと思う。

さらに他の嫌悪表現語を検討しなければ、正確な位置づけはできないものの、現段階では妥当な線ではないかと思う。

注(1)　美的理念語とは、美を評価する語のことを言う。美的語詞などという呼び方もある。

(2)　『枕草子』の「にくし」の価値、所収。

(3)　佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集、所収。

(4)　学習院女子短期大学紀要、所収。

(5)　右に同じ。

(6)　跡見学園短期大学紀要、所収。

(7)　跡見学園短期大学文科報、所収。

追記――本稿は平成八年度、特別研究助成費を受け、研究したものの一つである。